



# 生活・ものづくりの学びNetニュース

第2号  
2011年6月発行

3.11 大震災を「生活とものづくり」を原点から問い直す転換点に！

世話人副代表 沼口 博(産業教育研究連盟)

☆ 3.11 東日本大震災は私たちに今なお多くの災厄をもたらしていますが、他方で多くの経験と知見を与えてくれたように思います。被災された方々の困難は大変なものでしょうし、福島原発事故は今なお進行中で、依然、大変危機的な状況にあります。一刻も早く原発事故が終息するよう願うばかりです。

☆ 大震災後に私たち日本人がとった行動は、落ち着いた、節度と秩序のあるものだと海外からは驚嘆の声が寄せられました。新しい協力と共同の体制を作り上げ、復興を実現するために、特に若い人々の参加が大きな力となることでしょう。新しいコミュニティの創造を期待します。

☆ 今回の大震災は「科学・技術」に頼る生活に多くの問題があることを知らせてくれました。原発事故により、水や大気が汚染され、また電力不足から計画停電で電気も使えなくなってしまいました。これまで電気や水、空気はあって当たり前と考えていましたが、今回の大震災をきっかけに、当たり前と生きてきた私たちの生活をもう一度、改めて問い直す時が来ているように思われます。

☆ 原発事故による電力供給量の低下から、計画停電が実施され、さらに今夏は電力供給量が大幅に不足するとして、電力使用制限令が30数年ぶりに実施される見通しとなりました。現在、すでに街路灯が消され、コンビニ店舗の照明も減灯され、自動販売機の蛍光灯が消され、街全体が暗くなって

いますが、日常生活に不便を感じるほどではありません。この程度の節約には耐えられるのではないのでしょうか。これまで、必要以上に資源を浪費していたとすれば、生活を原点から問い直すことは不可欠です。



☆ 3.11以降、食料品の不足が続きましたが、乳幼児などを抱える家庭を除いて、我慢できないほどのものではありませんでした。大自然の脅威の前に「科学・技術」はなすすべもなく、その限界を思い知らされました。今日、私たちの生活に「科学・技術」は不可欠なものとなっていますが、もう一度、生活と「科学・技術」の関係はどのようなものであるべきか、じっくりと考える時が来ているように思われます。現代の資本主義社会は「科学・技術」を利用して大量生産、大量消費社会を造りだしました。その結果、必要以上に消費する仕組みを作り上げてしまったように思います。創り出された「欲望」に惑わされ、一見「便利」なコンビニ文化やファーストフード文化に中毒してはいないでしょうか？ ゆったりと生活を楽しむ豊かな文化が今、求められているように思います。

☆ 大震災の余韻が残っている今こそ、豊かな生活とはどういうものか、また、ものづくりの価値や意味について、少々暗い世の中ではありますが、明るい未来への展望を協同で切り開いて行くことが求められているのではないのでしょうか。

## 第2回総会のお知らせ

第1回交流会として、食と農の教育に必要な事を探求する企画を進めて参りましたが、東日本大震災後の諸般の事情により、交流会を中止することに致しました。参加を申し出ている方には中止の案内をだしましたが、当日、中止を知らずにいらした方がおられます。連絡不行き届きで申し訳ありませんでした。総会では交流会企画も実施しますので、皆様方、どうぞご参加くださるようお願いもうしあげます。

日時：9月25日（日）13:00～17:00

場所 聖心女子大学

企画1 講演とワークショップ

13:00～14:30

2号館4階40番教室他

講演「簡単にできる自分流食べ物—簡単な副菜とおやつ」 渋川祥子氏（横浜国立大学名誉教授）

ワークショップ「ペットボトルでできる生物育成」 内田康彦氏（東京都荒川区立尾久八幡中学校教員）

企画2 講演 14:40～16:00

宮代ホール

演題「これからの農業と私たちの生活」  
講師 中島紀一氏（茨城大学農学部教授）  
東日本大震災とそれに併発した原子力発電所の破壊という出来事は、私たちにこれからの生活スタイルの見なおしを提起していると言えます。今回は農業という視点からこれからの私たちの生活のあり方を考える機会にしたいと思います。

総会 16:10～17:00

## パンフレット作成の進捗状況

子ども達の人間性豊かな成長は、手と頭、そして五感を使って、モノや人とかかわる学び、つまり、生活やものづくりの学びによって培われています。

生活やものづくりの学びの充実を目指すネットワークでは、生活やものづくりの学びの重要性とともに、その中心的な教科である小学校家庭科、中学校技術・家庭科、高等学校家庭科の学習内容や授業時数の変遷、教員配置や施設・設備などの教育条件整備の課題について理解していただくための資料作成を進めています。



2010年10月に第1回委員会をスタートさせ、6名の委員で3月までに4回の会合をして、16頁にわたるパンフレットを作成

中です。主な内容は、生活やものづくりの学びがなぜ必要なのか、様々な実践の紹介、小・中・高等学校の家庭科、技術・家庭科の学習内容・授業時間の変遷、教員の配置状況、授業に必要な施設・設備等の財源措置、児童・生徒の学習の取組状況、新聞等にみる家庭科、技術・家庭科の学びの重要性や意見、私たちの主張などです。

昨年度中に完成する予定でしたが、3月の会合後、東日本大震災の影響で日程調整ができなかったことと、カラー16頁のパンフレット印刷の予算の目途が立たなかったことから、今年度の前半期には、完成させたいと考えています。委員は、石井克枝、安東茂樹、沼口博、佐々木貴子、知識明子、河野公子の6名です。（文責 河野公子）

## 相談・依頼・ロビー活動

これまでロビー活動という用語を使用してきたが、実質はこちらの考えを主張するというまでに至ってはならず、ネットの取り組みを伝え、意見を伺い、相談するという形で進めてきている。2011年1月以降は次の通りである。(それ以前の訪問先は、ニュース1号に掲載)、参加者は、世話人および事務局の数人である。

2011.1.19 (水) 神本みえ子議員 (民主党参議院・文教科学委員会筆頭理事) (福岡県)

元小学校の教員であったこともあって、こちらの話しをよく理解していただいた。

2011.2.4 (金) 水岡俊一議員 (民主党参議院文教科学委員会理事) (兵庫県)

元中学校技術科の教員であった議員で、親しく話しができ、趣旨をよく理解していただいた。但し、民主党は、現在は少人数学級の取り組みで精一杯であること、逆に、民主党の各議員を訪問し、議員の教育問題への関心を喚起して欲しい旨を希望された。

2011.2.22 日 (火) 京都造形芸術大学教授 寺脇研氏

寺脇氏は、文部省に勤務されていた時に、高等学校家庭科を所管する課長として、男女必履修の円滑実施のための施設・設備の整備や趣旨説明等に積極的に取り組んでいただいたことから、お話をうかがった。寺脇氏からは「ロビー活動というやり方は古い！今、鈴木寛副大臣が進めている「熟議」に参加し、市民レベルの取り組みを反映させるべきではないか」という意見をいただいた。

3月23日 (水) 東京都府中市立第二中学校校長・三浦登先生

三浦先生には、ネットを立ち上げる時に文面についてのアドバイスをいただいております、その後の経過報告にうかがった。大震災の直後であり、技術科として、生徒の有志が手回しラジオをつくり被災地へ送るという活動の段取りをとられていた。大震災に家庭科教育はどのように対応したらいいか考える機会となった。

3月31日 (木) 中央教育審議会委員 衛藤隆先生

(元東京大学教授、社会福祉法人恩賜財団母子愛育会日本子ども家庭総合研究所副所長)

衛藤先生の訪問は、流田先生つながりで、流田直先生と一緒に訪問した。

長く中央教育審議会委員をされていて、審議会でも生活やものづくりの重要性は話されていないわけではないこと、又委員会であることを形にするには、委員のなかでそれを声を大きくして継続して話すことが実を結んできたことを話された。そのために、ネットとしては、具体的な資料等を継続的に委員にわたし、継続的に話していくことが重要と感じた。また家庭科は、「生きる力」を吟味し、前面に出していく方がいいのではないかというご意見も頂いた。

4月25日 (月) 全日本中学校技術・家庭科研究会元会長・現在同顧問会事務局長・元東京都北区立明桜中学校校長・岩附政美先生 (北区教育センター)

技術科の先生と協同的に取り組むことについて相談した。ものづくりの教育の意味とともに、子ども達は他教科の学習も望んでいることを話された。

5月19日 (木) 全日本中学校技術・家庭科研究会元会長・現在同顧問会会長・元東京都中央区立日本橋中学校校長・塩入睦夫先生 (東京都中央区教育センター一長)

技術・家庭という「・」でつながっているこの教科の将来も見据える必要があるのではないかと、また、技術と家庭を統合したような実践を沢山つくり、アピールしていく必要があるのではないかと意見をいただいた。そして、このネットの呼びかけ人になっていただいた。

以上ですが、頂いた意見を、今後の活動の充実(8頁)に反映させています。

また、実行委員の皆様へのお願いです。中央教育審議会委員への訪問をよろしくごお願い申し上げます。

(文責 鶴田敦子)

## 潮流「週間教育資料」インタビュー記事の紹介

2011年2月に2週連続して、日本教育新聞社の「週間教育資料」に潮流「鶴田敦子氏へ聞く」④⑤という記事が掲載されました。

【生活を支える知・徳・体】2月21日号 No.1151, p4～6



【家庭科学習が PISA 型学力を培う】2月28日号 No.1152, p4～6

インタビューは2月4日に、本ネットワーク世話人代表の鶴田敦子氏が池袋にて受け、取材に事務局が同行しました。「なぜネットワークを起す必要があったのか」と質問されたので、家庭科、技術科の教育の現状から歴史まで、また、今の社会でなぜこれらの学習が必要かなど、1時間半ほど話されました。記者氏は、1月末の「ものづくりフェア」に取材に行って本ネットワークのパンフとニュースを見て、取材申込をしてきたそうです。宣伝はしてみるものですね。



### 会員の声①昨年9月の設立総会後のアンケートより

・「子どもにどんな人になってほしいのか」みんなで考えていきたい。(学生)

保護者、地域、企業へも「開かれた学校づくり」に期待感！ (小学校教員)

・男性の参加が少ない。高校生なども参加する機会が実現できるとよい。(市民)

・今後「熟議カケアイ」も見ていく。教育論を大切にしているものづくりを柱に。(大学教員)

・会の趣旨はわかるが、具体的に何をするのが今ひとつ。専科教員増、授業時間増など具体的な要求だとわかりやすい。(市民)

・今の大人が体験した技術・家庭科が現在はかなり変わっていることが理解されていない。

・学習指導要領の細部にとらわれて授業がキュウキュウとしているように感じる。一人ひとりの子どもが物づくりに取り組んでその喜びが感じられる、そんな教育をと痛感している。そのための一つとして教師自身の力を蓄え高めることかと思う。(大学教員)



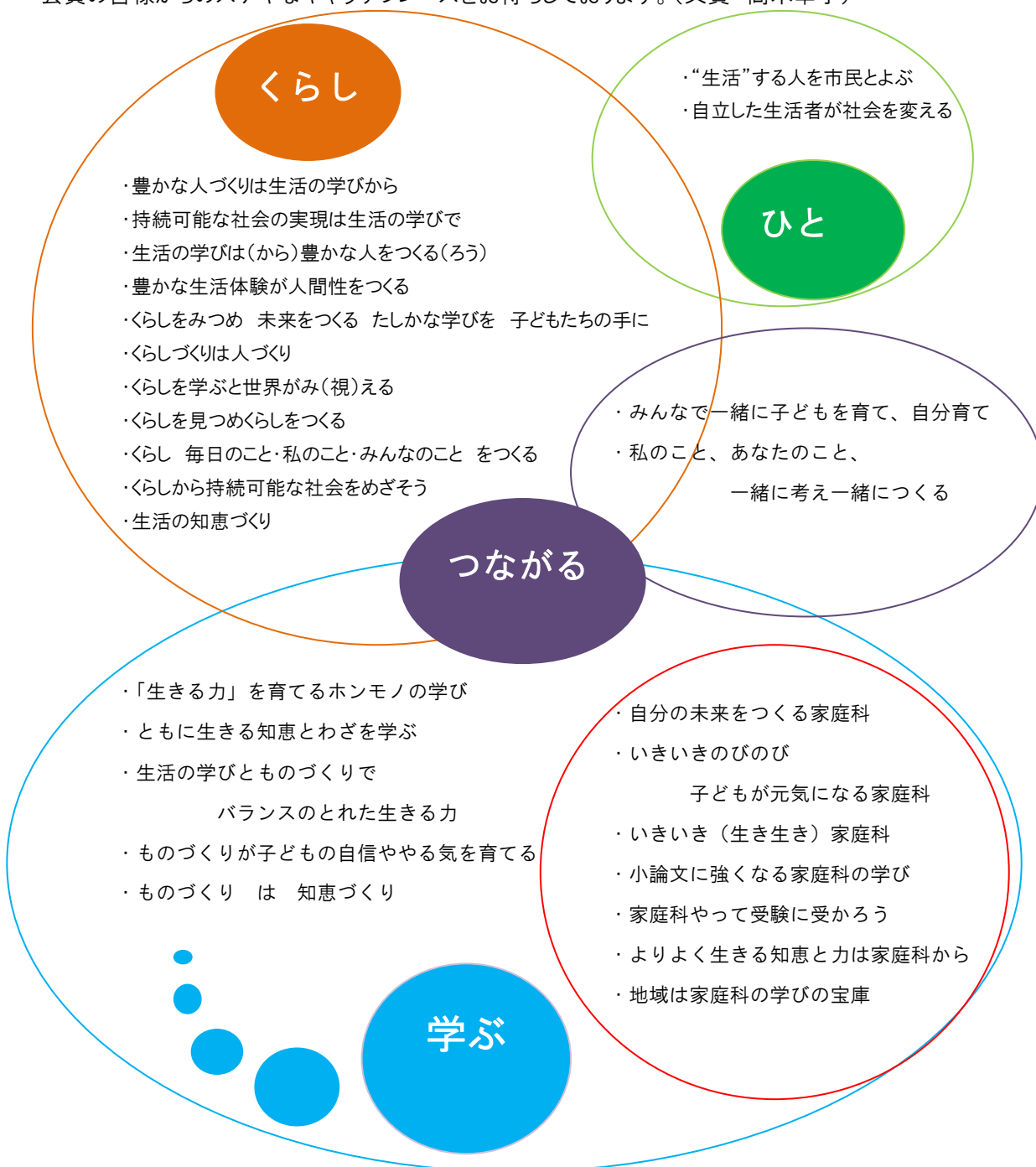


## 会員の声②

### 生活とものづくりネットワークにピッタリなキャッチフレーズを募集♪

2011年3月5日に開催した実行委員会では、「生活とものづくりのネットワーク」にふさわしいキャッチフレーズ案を出し合いました。短い時間に次々とキャッチフレーズ案が提案され、ネットワークへの多様な期待を共有することができました。

会員の皆様からのステキなキャッチフレーズをお待ちしております。(文責 高木幸子)



# 大震災に対する参加団体の取り組み

## ◆技術科の取り組み

「手回し発電ラジオ」を製作し被災地に送付！

日本産業技術教育学会会長 安東茂樹（京都教育大学）

### ■□ 被災地への支援の概要

日本産業技術教育学会では、会長である安東から、学会員の熊本大学の田口准教授、埼玉大学の浅田教授と連絡を取り合いながら、それぞれの大学で、特に技術科の学生達を中心に全国中学校産業教育教材振興協会の協力を得ながら「手回し発電ラジオ」を製作して被災地に送付する活動を行った。

3月下旬文部科学省の上野調査官、そして全国中学校産業教育教材振興協会の岡田会長をはじめ役員の山崎氏、長田氏、鬼頭氏、藤田氏などのご賛同を得て、技術科教育の教員養成に携わる大学で東日本大震災の支援について協議し、「手回し発電ラジオ」を製作して被災地に届ける活動を実施した。

技術科教育では、「手回し発電ラジオ」を製作題材の一つとして取り上げている。今回用いた「手回し発電ラジオ」は、人の力さえあれば、ラジオからの情報を聞け、暗いときにはライトとして明るくでき、緊急時にはサイレンが鳴り点滅で知らせることもでき、携帯電話の充電ができるという多機能な働きができる。電気がストップしている状況下では、非常に有効に活用できることがこれまでの震災でも証明されている。

以下に、各大学の実践を紹介する。

### ■□ 熊本大学での取り組み

学教育学部技術教育の学生30名により、計100台の「手回し発電ラジオ」を2日間で完成させた。

災地への輸送は、東京書籍の東北支社に送付。支社の社員の方により、教育委員会や学校を通じて届けていただいた。

### ■□ 京都教育大学での取り組み

電気、機械、教科教育、情報担当の教員6名と大学

院生8名、そして学部生20名ほどで計42台を製作した。輸送については、学会員である宮城教育大学技術科水谷教授の仙台市内の自宅に送付した。それを教授自らの車で塩竈の避難所まで運び、被災された方に手渡した。

### ■□ 埼玉大学での取り組み

教育学部学生と県内の中学生（春日部中学校、緑中学校、中央中学校、川口西中学校）で、計100台を製作した。輸送は、RQ市民災害センターを通じて宮城県気仙沼市へ30台、日本木材青壮年団体連合会の岩手県会員を通じて岩手県久慈市へ30台、NPO法人日本の森バイオマスネットワークを通じて宮城県栗原市の支援センターへ40台である。



### ■□ 活動を通じて・・・

完成した一つ一つの製品には可能な限り製作者からの添付激励の言葉やメッセージを添えて梱包した。受け取られた被災者の方から感謝の言葉がたくさん寄せられた。塩竈市の避難所に届けた「手回し発電ラジオ」に対して、市長さん自らお礼の電話が寄せられた。

この活動を通じ“ものづくり”に関わる技術科教育の意義を再認識するとともに、大学間及び企業やNPOなどとの関係が築けた。そして何より、被災された地域や人々との関係が築け、支援の一助を担えたことが幸せである。

### ◆ (社) 日本家政学会の取り組み

この度の東日本大震災は、原発事故も重なって、かつてない大災害となりました。日本家政学会では、早い復興のために、生活科学を専門とする会員の知恵を集め、行動していこうと考えました。そこで、生活者の視点に立った復興支援への提言や実践について取り組むプロジェクト“東日本大震災後の生活研究プロジェクト(仮称)”を発足します。発足に向けて、緊急に5月29日に(社)日本家政学会第63回大会でシンポジウムを開催し、生活再生への課題や、震災の現場からの現状を報告し



ていただくことになりました。シンポジストは宮野道雄氏(大阪市立大学)、岸本幸臣氏(羽衣国際大学)、坂田隆氏(石巻専修大学)です。できるだけ多くの会員が参加して、有意義なシンポジウムにしたいと期待しています。

また、これまでに家政学会に対して被災された現場からの要望も来ています。例えば、被災地の図書館からは家政学会の刊行物の寄贈の願い出があり、対応しました。救援物資として届けられた衣服のサイズを直すための裁縫道具の要望には、被服関係の部会や支部が中心となって、会員に裁縫セットの寄付を呼びかけ、現地に送付することにしました。学会員に対しては、第63回大会に参加され方の参加費免除など、研究活動をサポートしています。(文責 猪又美栄子)

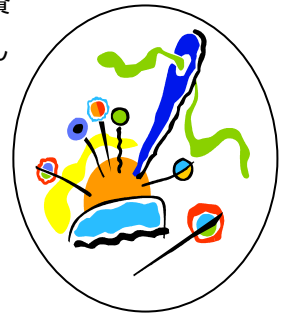
(写真は第63回家政学会大会でのネットのブース)

### ◆本ネットワークの取り組み

東日本大震災による避難住民に**裁縫道具を送る**ことについてのよびかけ

生活やものづくりに必要な学びの充実をめざすネットワーク世話人会

現在も多数の方が長期の避難所での生活を強いられています。そのなかで、救援物資として届けられた衣類が、サイズが合わず着られずに放っておかれている物がたくさんあり、避難してきている中高年の女性の方々が裁縫道具があったら直せるのにと、1人1セットずつの裁縫道具セットを希望しており、緊急に裁縫道具セットを集め、現地に送る依頼が、会員の大竹先生のところがありました。少なくとも、1000セット以上を希望されているようです。そこで、本ネットとして、以下について会員の皆様に呼びかけることにしました。どうぞ、よろしくご協力のほど、お願い申し上げます。



裁縫道具を購入するための寄付へのご協力をお願いします。

個人会員 一口1,000円 団体会員 一口5,000円

それをもとに、至急、裁縫箱・裁縫道具(約2,500円)を購入し、宮城県の担当部局へ送付します。

振込先など詳細は挟み込んだ別紙2011年度年会費納入のお願い及びその裏面をご覧ください。

### ◆奈良教育大学「お手玉100個プロジェクト」の紹介

家庭科教育専修の学生が、東日本大震災の被災地へ届けるために鈴木洋子先生のご指導のもと、「お手玉100個プロジェクト」を立ち上げました。学内で有志を募り、最終的に17名の学生がプロジェクトに参加。3月末に企画を開始し、4月1日から本格的に作成し始めました。お手玉5つと巾着袋1つをセットにし、メッセージカードを添



えてラッピングしたものを作成、4月19日に学生支援課を通じて現地へ発送しました。（奈良教育大学HP、[http://www.nara-edu.ac.jp/ADMIN/SECRETARY/otedama\\_project.html](http://www.nara-edu.ac.jp/ADMIN/SECRETARY/otedama_project.html)より）

## 〈是非、実行委員になってください〉

（今後の活動の充実について）

現在、企画はおもに世話人、実行はおもに実行委員が中心に活動を進めています。

会員は、是非、実行委員になってくださるようお願いします。

実行委員の仕事は「実践をつくる（宣伝する）」「会員を増やす」「中央教育審議会委員に話しに行く」などです。

1) 実行委員の先生方で家庭科、技術・家庭科の実践を創り出し、実践交流の場を設定し、文部科学省の「熟議」（文部科学省HP参照）と連携してください。

2) 1) をメディアに取り上げてくれるように働きかけてください。また世話人もいくつかのメディアとつながりが出来はじめていますので、連絡してください。

3) メーリングリストでそれらの情報を交流してください。

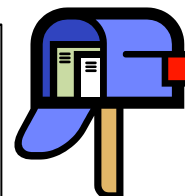
付1 各県の実行委員の責任者は事務局に問い合わせてください。

付2 中央教育審議会委員の訪問が具体的になった場合はMLで流してください。可能な人は参加しましょう。

付3 技術・家庭科がよくわかるビジュアル版パンフレットは、現在、作成中です。

以上です。（文責 鶴田敦子）

メーリングリスト  
作成のお知らせ  
（事務局より）



事務局からのお知らせや会員相互の通信がeメールでできるように、ネットワークのメーリングリストを作成しました。メールアドレスをお知らせくださった方には手続きをしましたので **freeml** からの参加通知メールが届いたと思います。**参加承諾メールを送ってくださった方のみメンバーに登録されます。**今後もメールアドレス（携帯メールも可）をネット事務局にお知らせくださった方には追加手続きをします。

### 会員拡大活動のお願い

生活やものづくりに基づいた教育の必要性の声を高めるために、皆様に会員を一人でも増やしていただく必要があります。

お手持ちのリーフレットをコピーするなどして、ネットワークを周りの方や研究会のメンバー、教員、学生、保護者、一般の方に紹介し入会をお勧めくださるようお願いいたします。

発行者 生活やものづくりに必要な学びの充実をめざすネットワーク 事務局  
〒112-0012 東京都文京区大塚4-39-11 仲町YTビル3F 日本家庭科教育学会事務局 気付  
メールアドレス：seikatsu\_nt@yahoo.co.jp FAX：03-3902-1668  
ホームページ：[http://www.geocities.jp/seikatsu\\_monozukuri\\_nt/](http://www.geocities.jp/seikatsu_monozukuri_nt/)